

ISBN4-7601-2252-4

C0021 ¥2000E

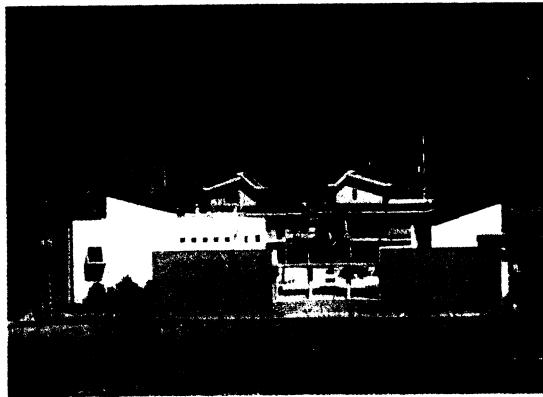
定価(本体2,000円+税)



9784760122523



1920021020001



ナヌムの家歴史館ハンドブック

나눔의 집

ナヌムの家歴史館後援

ナヌムの家歴史館  
ハンドブック

나눔의

집

ナヌムの家歴史館後援会=編

つづき ☎048-2424

横浜市立図書館



2027754620

210.7

柏書房



ハンドスン  
韓道順ハルモニ

チョルラプットワンジュ

1918年（戸籍上は1921年）4月19日、全羅北道完州郡で4男1女の一人娘として生まれる。

14歳のとき、家が貧しくて口減らしのため嫁に出された。結婚しておよそ3年間暮らしたものの、夫が亡くなり、実家に戻るようになった。

19歳の春（1936年ごろと推定）、山に行こうとして家を出ると、見ず知らずの年配の男性が、お前は本当にかわいいといいながら、自分について来たら贅沢をさせてやるといった。嫌だといったら髪を引っ張って無理矢理に連れていかれたところが「満州」だった。それから9年間、「慰安婦」として監禁されたまま生活した。

慰安所の主人は日本人夫妻で民間人だった。他の女性も10名ほどいた。その家にしばらくいた後、他の慰安所に移った。平屋建ての家だった。軍人たちは歩いてやってきた。平日にも週末にも来るが、休日や土曜日に多かった。多くの軍人の相手をしなければならず、とても辛くて嫌だと拒否しようとする、激しく殴られた。剣を下げた軍人が来ると、とても怖かった。他の女性は足で蹴られたりもした。母を思い出してはよく泣いたという。

月に一度は主人に連れられ病院に行った。性病検診を受けるためだが、妊娠したり性病にかかったりしたことはない。他の女性のなかには、病名は知らないが病気にかかった人もいたという。

慰安所の主人や軍人から、お金を受け取ったことは一度もない。後でくれるという話もなかった。月に一度は休みの日があり、その日は一日中寝た。

ある日、主人夫妻が全て終わったから村に行けといい、汽車賃をくれた。汽車賃のほかには1銭も持っていなかった。他の女性たちは何処へ行ったのかわからないが、汽車に乗って故郷に向かった。眠ることができなかった。汽車には同胞だけが乗っており、故郷までは3日間ほどかかった。

家に帰るとすでに冬だった（1945年推定）。村の人々からは「満州に行って来たいわくつきの女」と陰口をたたかれて蔑まれた。

再び、下働きなどで転々と食いつないでいた。61歳のとき、息子3人、娘3人を持った老人と結婚し、11年間一緒に暮らしたが、93年11月に夫に先だたれ、

その後生活保護対象者となる。甥の申請で「慰安婦」対象登録をして2000年4月からナムムの家に入り生活している。

ナムムの家のなかでは最年長者だが、2000年12月「女性国際戦犯法廷」にも参席し、水曜デモにも一度も欠かさず出席するなど、ナムムの家の対外的な行事に黙々と参加している。子どものような天真爛漫な面があり、誰が何と言おうと「ああ、そう」と答える。1998年腰を痛め、常に腰にサポーターを巻いて15度くらい反り返って歩く姿が痛々しい。



カンイルチュル  
姜日出ハルモニ

キョンサンブットサンジュ アンドンミョン

1928年10月26日、慶尚北道尚州郡 安東面で12人兄弟の末っ子として生まれる。そのとき、すでに上の兄弟6人は亡くなっていた。子ども時代、いどこに連れられて学校に通っていたが、父母の畑仕事の手伝いや、食事の準備などで学校にはあまり通えず、14歳ごろからは家にいた。

連行されたのは1943年、16歳のときだった。当時「処女供出」「報国隊」の名目で若い女性を募集する動きが激しくなっており、ハルモニの家にも警察が刀をさげてやって来た。そのとき、家にはいとことハルモニしかおらず、とても拒絶できる状況ではなかった。しかも軍靴の紐を編む工場<sup>ひも</sup>で働く<sup>ひも</sup>と騙されたのだ。

その後、多くの朝鮮人、日本人、中国人の女性たちとともに汽車や車、トラックで中国の奉天（現在の瀋陽）から新京（現在の長春）、牡丹江へと移動させられた。途中で降ろされる女性もいれば、新たに加わる女性もいた。牡丹江の慰安所は煉瓦造りの兵舎のような所だった。そこで30余名の女性たちとともに「慰安婦」生活を強いられた。

到着後まもなく全員車に乗せられ、軍人病院に連れていかれて身体検査を受けた。工場<sup>ひも</sup>で働かされるものと思っていたハルモニは、何がなんだかわからなかった。性病検査は耐えがたいものだったが、その後も週に1回ぐらい定期的に検診を受けさせられた。

慰安所では「オカダ」と呼ばれた。朝鮮人女性をはじめ日本の女性、台湾の女性もいた。ひとつの部屋にいれられ、呼ばれると出て行った。ハルモニは当

初年配の将校の相手をさせられた。まだ生理も始まっておらず、想像を絶する苦痛を受けたうえ、あふれる血を見て叫んだハルモニを見て、彼は胸倉をつかんで押さえつけながら殴ったり蹴ったりした。そのとき頭を殴られたのが原因で膿が出るなど長い間苦しめられ、いまでもそのときの傷跡が残っている。

その後はひとつの部屋があてがわれ、1日に7、8名の兵士の相手をさせられた。しかし、暴力は止むことなく続いた。慰安所に来た翌年の春に腸チフスにかかり、高熱が続き、食事も摂れなくなってしまった。軍は他の人に移されることを恐れ、ハルモニを焼き殺してしまおうと考えたらしい。1945年初夏の頃、軍人に連れられ車に乗せられて山のふもとに行くと、すでに薪を積み上げ、火を燃やしていた。しかしそのとき、朝鮮人たちが日本の軍人と乱闘のすえ、ハルモニを背負って逃げた。

逃亡後、ある朝鮮人の家に預けられ、そこでしばらく養生した後、ある朝鮮人男性と結婚した。1女をもうけたが、その後朝鮮戦争がはじまり、中国人民志願軍として参戦した夫は戦争で死亡、娘も3歳ぐらいで病気で死んでしまった。19歳のときだった。朝鮮戦争時は、(中国人民)解放軍の看護婦として働き、戦後も中国吉林の病院で看護婦として勤務しながらひとりで暮らしてきた。

30歳を過ぎて中国人と結婚するが、夫の浮気などが原因で1962年、故郷に帰ろうと子どもを背負って平壤まで行った。しかし、軍事境界線に阻まれて故郷には帰れないことがわかり、再び中国に帰った。このため、しばらくスパイの疑いをかけられた。

その後夫とは離婚、46歳で退職し、吉林市で年金生活を送っていた。2男1女がいる。数年前、「ナナムの家」が推進する帰国事業のことを知り、何回かの祖国訪問を経て息子とともに帰国を果たした。2000年4月にナナムの家に入居、同年10月には国籍回復も実現した。

現在、高血圧と糖尿病を患っており、白内障の手術も受けた。「慰安婦」生活の後遺症で、今でも頭痛に悩まされ、緊張すると身体がぶるぶる震えたり、鼻血が出るなど、心と身体に負った傷の深さを物語っている。また、入居当初は「ナナムの家」での生活になじめず、何日間も家を空けたりしていたが、現在では得意の「餃子」や中国料理をふるまったり、韓国語が不自由で耳の遠い池石伊ハルモニの面倒を見るなど、なごやかに過ごしている。

## ◎ナナムの家で暮らしていたハルモニ



キムボクトン  
金福童ハルモニ

キョンサンナムドヤンサン  
慶尚南道梁山で1926年5月1日、6人姉妹の4番目として生まれる。15歳になった1941年のある日、村の区長と黄色い服を着た日本人が家に来て、息子がいないのなら娘でも挺身隊に差し出さなければならないといった。母が挺身隊とは何かと尋ねると、軍服工場で働き、3年したら帰ってこられると言って無理に書類に判を押させた。

そうしてハルモニはバスで釜山に連れていかれ、他の地方から連れてこられた結婚前の20名くらいの女性とともに倉庫に監禁された。ハルモニを連れにきた日本人と、日本に長く住んだという通訳の朝鮮人がハルモニたちを引率し、下関を経て台湾に連れてきた。そこでハルモニたちはモンペに着替えさせられ、言われたとおりの手紙を書いて親に送った。再び貨物船に乗せられ着いたところは広東だった。ハルモニたちは衛生病院に連れていかれ強制的に性病検査され、ある建物に連れていかれた。そこは悪夢のような日々が始まる慰安所だった。建物の真中に廊下があり両側に部屋があった。ハルモニたちは番号と「慰安婦」の名前が書いてある部屋をあてがわれた。部屋は狭く木の寝台が1つあるだけだった。隣とはベニヤ板で仕切ってあるだけで息遣いまで聞こえた。ハルモニたちは慰安所からは外にでられず、引率してきた日本人と朝鮮人が門の前で監視していた。その日の昼、軍医がハルモニの部屋に来て逃げるハルモニを捕らえ、すごい力で頬を殴った。怖くて抵抗する力も失せ、なすがままになったが、初めてのことで怖くて震えがとまらなかった。性器から血が出て裂けるように痛く腫れ上がった。小水も出なかった。死のうと思い手に入れた白乾児酒を飲んだが見つかって胃を洗滌され死ねなかった。それが原因で3か月間も食事がまともに出来ず、今も胃が悪く苦しんでいる。

ハルモニたちは1日に15人程度、週末は50人を超える男を相手にしなければならなかった。名前も「カネムラ・フユコ」または「ヨシコ」と日本名をつけられた。性病検査は1週間ごとに定期的にさせられた。しばらくして急にトラッ